

ジョルジョ・ヴァザーリと「画家の礼拝堂」——彫像のまなざしと死者の記念——

古川 萌（京都大学）

フィレンツェのサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂内にある、聖ルカ礼拝堂、通称「画家の礼拝堂」は、画家・建築家ジョルジョ・ヴァザーリ（1511-1574）が中心となって1563年に創立した、アカデミア・デル・ディセーニョの本拠地として知られている。同礼拝堂の内部装飾は、1567年頃から1575年にかけて、ヴァザーリを含む上記アカデミア会員たちによって制作された。本発表は、ヴァザーリが絵画装飾のみならず、礼拝堂の装飾プログラム考案にも関与している可能性を指摘し、この礼拝堂全体をヴァザーリの活動の文脈上に位置づけようと試みるものである。

画家の礼拝堂の装飾は壁面全体に及ぶが、そのなかでも中心となるのは三点の絵画と十二点の彫刻である。入り口から向かって正面の祭壇には《聖三位一体》が置かれ、その右側に旧約聖書の主題、左側に新約聖書の主題が展開される。装飾プログラム考案に関しては、先行研究では、アカデミア会員の記録にしたがって、アンヌンツィアータ修道院長ミケランジェロ・ナルディーニによるものとみなされてきた。だが、当該の記録を参照すると、ナルディーニによる指示は曖昧なものに留まっている。一方でヴァザーリは、時の君主であったフィレンツェ公コジモ一世（1519-1574）へ1563年に書き送った手紙のなかで、アカデミアの拠点を彫刻と絵画で装飾するという、画家の礼拝堂を彷彿とさせる室内装飾の構想について語っていた。そこから、礼拝堂の装飾プログラム考案において、ナルディーニに先立ってヴァザーリが骨組みとなる構造を提案していた可能性を指摘する。

また、画家の礼拝堂がアカデミア会員のための埋葬場所としても機能していたことにも着目する。礼拝堂中央に設けられた芸術家共同墓碑は、自らの墓を持たない芸術家たちのために、彫刻家G. A. モントールソリ（1507-1563）によって制作されたものであったが、それはヴァザーリの関心とも合致していた。というのもヴァザーリは、すでに著書『芸術家列伝』（初版1550、第二版1568）において、個々の芸術家の伝記を書き残すことで、彼らの名前を歴史に刻み、記憶するという営みを実践しているからである。死者の記念に並々ならぬ関心を抱き、芸術家の墓碑銘を集めていたヴァザーリにとって、芸術家共同墓碑は特別な場として認識されていた。

さらに、以上の考察を踏まえ、壁面に設置された彫刻群の視線が一様に礼拝堂中央に向かっていくことについて検討したい。彫刻群は16世紀当時と現在では位置が変更されているが、もとの配置を想定すると、彫刻群の視線はいずれも芸術家共同墓碑のある礼拝堂中央部分へと注がれているのが明らかとなる。死者を記念する場である画家の礼拝堂において、彫刻群はその営みを見届ける目撃者として立ちあらわれるのだ。したがって、画家の礼拝堂はヴァザーリが目指した死せる芸術家たちの記憶の場として、そしてそうした記念行為が繰り返される場として解釈されるのである。